全球時代視域下的生態女性主義視點閱讀多和田葉子《在地球各角落發光發亮》：日本滅亡的真義

曾秋桂

淡江大學日本語文學系教授

要旨

《獻燈使》自榮獲 2018 年度日本國際交流基金賞、11 月美國全美圖書賞之後，作家多和田葉子更受到世界的矚目。

繼《獻燈使》之後發表的《在地球各角落發光發亮》作品中的遣辭用句、場所設定、人類環境課題，可以掌握其欲描繪全球時代視域的意圖。然而作品中描繪的日本，不僅是沒積極參與全球社會而是銷聲匿跡地滅亡了。於是本論文聚焦於全球化時代下日本滅亡此設定，從全球時代視域下的生態女性主義視點來論述《在地球各角落發光發亮》，探索日本滅亡的真義。

考察結果顯示由於核能發電廠悲劇以及地球溫暖化雙重影響而引發日本滅亡，正是對於過度開發核能技術現況敲響警鐘。《獻燈使》是從人類遭受核災影響的日本共同體的內面來描繪的作品。而《在地球各角落發光發亮》則是人類遭受核災影響的日本共同體從外面來描繪的作品，兩部作品互為內、外對照的一雙作品。總而言之，《在地球各角落發光發亮》是全球時代視域下，挖掘生態女性主義視點透視諸問題之新觀點描繪的經典文學名著。

關鍵字:全球時代視域、生態女性主義、《獻燈使》、《在地球各角落發光發亮》、日本滅亡

受理日期:2019 年 08 月 19 日

通過日期:2019 年 11 月 15 日

台灣日語教育學報第35號 禁止複製

Reading Yoko Tawada's “Chikyu ni chribamerarete” from the Perspective of Ecofeminism in the Global Era,: Concerning to the Reality of Japan's Disappearance

Tseng, Chiu-Kuei

Professor, Department of Japanese, Tamkang University

Abstract

Yoko Tawada has gained more and more attention from around the world since “The Emissary” was awarded the Japan Foundation Award 2018 and the US National Book Award in November of the same year.

The intention of drawing a global era can be read from the wording, the setting of the place, and the issues of humans and the environment in “Chikyu ni chribamerarete”, which were published after the “The Emissary”. However, rather than actively participating in the global society, Japan has disappeared in this novel. Therefore, in this paper, we will focuse on the disappearance of Japan in the global era, and from the perspective of ecofeminism in the global era, we will try to get the meaning of “Chikyu ni chribamerarete” and explored the true meaning of Japan's disappearance.

As a result of the discussion, it can be said that the disappearance of Japan due to the double tragedy of the nuclear power plant effects and the effects of global warming is a warning ring to the nuclear technology that was developed strictly. In the “The Emissary”, the Japanese community that was affected by the nuclear accident was drawn from the inside, whereas “Chikyu ni chribamerarete” that drawn the disappearing Japanese community from the outside is appropriate for the global era. It can be said that this novel is a literary work drawn from a new perspective that delves deeper.

Keywords: global era, ecofeminism, “The Emissary”,

“Chikyu ni chribamerarete”, disappearance of Japan

台灣日語教育學報第33號 禁止複製

グローバル時代のエコフェミニズムの視点から読む多和田葉子の『地球にちりばめられて』
―日本が消滅したことの真意について―

曾秋桂
淡江大学日本語文学科教授

要旨

『献灯使』が 2018 年度日本国際交流基金賞、同年 11 月にアメリカの全米図書賞を受賞してから、作家多和田葉子は世界からますます注目されるようになった。

『献灯使』の後に発表された『地球にちりばめられて』の言葉遣い、場所設定、人間と環境との課題からは、グローバル時代を描く意図が読み取れる。しかし、日本は積極的にグローバル社会に参与するどころか、消滅したという設定になっている。そこで、本論文では、グローバル時代において日本が消滅したことに注目し、グローバル時代のエコフェミニズムの視点から、『地球にちりばめられて』の読解を試み、日本消滅の真意を探ってみることにした。

考察した結果、原子力発電所の悲劇と地球の温暖化の二重の影響に起因した日本消滅は、正に過酷に開発された原発技術へ鳴らす警鐘だと言ってもよかろう。『献灯使』では人間が原発事故の影響を受けた日本共同体を内側から描いたのに対して、消滅した日本共同体を外側から描いた『地球にちりばめられて』こそ、グローバル時代に相応しく、諸問題を一段と掘り下げた新しい視点で描きえた文学作品だと言えよう。

キーワード：グローバル時代、エコフェミニズム、『献灯使』、『地球にちりばめられて』、日本の消滅

台灣日語教育學報第39號 禁止複製

グローバル時代のエコフェミニズムの視点から読む多和田葉子の『地球にちりばめられて』
―日本が消滅したことの真意について

曾秋桂
淡江大学日本語文学科教授

1.はじめに

越境作家として名高いドイツ滞在の日本人作家多和田葉子は、『献灯使』(2014年、講談社。2017年、繁体字中文訳『獻燈使』瑞蘭國際有限公司)により、2018 年度国際交流基金賞を受賞しただけではなく、同年 11 月にアメリカで最も権威のある文学賞の一つである全米図書賞も獲得した。『献灯使』が東日本大震災(2011.3.11)後、原発に関心を強く持ち続けている多和田葉子によって出された反響の大きな著作である。このように、作家多和田葉子の存在、そして『献灯使』は世界からますます脚光を浴びるようになった。

『献灯使』の後に発表した『地球にちりばめられて』(2016年『群像』雑誌掲載、2018年、講談社)を読むと、気づいた 3 点がある。まず作品に散見した「地球文化」(P40)、「地球人」(P41)、「地球」(P44)、「僕らはみんな、一つのボールの上で暮らしている」(P116)の言葉から見れば、地球で暮らしている人類を一つの単位に見る世界観が伺われる。次に作品空間をヨーロッパに限らず、アジア、アフリカ、アメリカ、カナダ、インドなどのように、広地域に設定したことからは、グローバル時代を描く意図がありありと読み取れる。ただし、グローバル時代の下で描いた『地球にちりばめられて』だが、日本は積極的にグローバル社会に参与するどころか、消滅したという設定になっている。グローバル時代には特に吟味すべき所であろう。最後に魚料理のメニューに星印でつけた魚が死んだ時の「痛さ加減」(P23)、捕鯨、闘牛などの動物虐待に抗議する「自然保護団体」(P186.248)、「動物保護団体」(P131)が主張した動物権利、「環

台灣日語教育學報第35號 禁止複製

境汚染」(P238)などのように、人間と環境との課題も盛り込まれている。上記の3点から見れば、『地球にちりばめられて』は、グローバル時代のエコフェミニズムの視点から読むに値する好材料だと言ってもよかろう。

そこで、本論文では、グローバル時代において日本が消滅したことに注目し、グローバル時代のエコフェミニズムの視点から、『地球にちりばめられて』の読解を試み、日本消滅の真意を探ってみようとするのである。

2.エコフェミニズム(eco-feminism)[1]の概念

エコフェミニズム(eco-feminism)はエコロジカル(ecological)とフェミニズム(feminism)を組み合わせて出来た言葉で、1974年に環境革新を先導する女性たちに呼びかけたフランスのフランソワーズ・ドゥボンヌによって命名された用語である。人間による自然の支配と男性による女性の支配には重要な関係があるという洞察から、新しい自然と人間の関係、女性と男性の関係を求める思想として、アメリカで一層発展したそうである[2]。

多岐に発展してきたエコフェミニズム(eco-feminism)について、渡久山清美・渡久山幸功が「男性による女性支配(女性への抑圧構造)と人間による自然支配(自然・生態系に対する抑圧構造)は、同一の社会システム、資本主義家父長制あるいは開発家父長制という男性権力構造に起因する」[3]ことに注目し、「男性社会が作り上げた、この支配の構造それ自体を解消しないかぎり、環境問題も、女性支配

台灣日語教育學報第33號 禁止複製

[1] エコフェミニズムに関する記述は、詳しく曾秋桂「エコフェミニズムの視点から読む『チェルノブイリの祈り』」(2018)『台湾日本語教育論文集』第30号台湾日語教育学会P186-204を参照されたい。
[2] 井上輝子・上野千鶴子代表編(2000)『岩波女性学事典』岩波書店P44。
[3] 渡久山清美・渡久山幸功(2013)「エコフェミニズム再考一開発資本主義家父長制に対するオルタナティブな理論として一」『人間学科』29号琉球大学法文学部人間科学科P156。

もなくならない」[4]とする森岡正博の政治思想概念に触れ[5]、より広い視野で、「真の意味での社会変革を実現するために必要とされるエコフェミニズムは、女性だけではなく男性にも開かれているという認識を持って、脱男制的な男性、つまり、ステレオタイプ的な男性像を追い求めることのない、エコフェミニズム的思考を擁する男性[6]をエコフェミニズム運動に取り込んだり、増やしていくような包括的な理論構築の実践である」[7]と提案した。さらに、「エコフェミニズムは、(自然と女性という)単立した問題についての運動に終始するのではなく、すべての被抑圧集団の解放をめざす思想に至る」と再定義した喜納育江の説[8]を取り入れた渡久山清美・渡久山幸功は、「あらゆる抑圧を生産する支配関係を問い直すのがエコフェミニズムの基本思考であり、特に、グローバル化が進む経済構造や生態系の環境問題の時代を迎えた 21 世紀の現在、このような認識を極めて有効な概念であろう」[9]と帰結した。

そこで、本論文では、渡久山清美・渡久山幸功が広汎に下した「あらゆる抑圧を生産する支配関係を問い直す」ことをエコフェミニズムの定義・指針とするのである。以下、それに基づき、『地球にちりばめられて』を考察し、日本の消滅の真意を探ることにする。

台灣日語教育學報第33號 禁止複製

3. 『地球にちりばめられて』の概観

まず、『地球にちりばめられて』を概観し、作品構造から浮び上がってくる焦点を明らかにする。

---

[4] 森岡正博(1995)「エコロジーと女性―エコフェミニズム」小原秀雄監修『環境思想の系譜・3』東海大学出版会 P152。

[5] 渡久山清美・渡久山幸功(2013)「エコフェミニズム再考一開発資本主義家父長制に対するオルタナティブな理論として一」『人間学科』29 号琉球大学法文学部人間科学科 P156。

[6] 山口裕司(2003)「エコフェミニズムの論点とその可能性―C・マーチャントを手がかりに―」『宮崎公立大学人文学部紀要』第 10 巻 1 号宮崎公立大学人文学部 P315 で触れた長年原子力問題と取り組んできた高木仁三郎がその好例である。

[7] 同注 5、P176。

[8] 喜納育江(2011)『〈故郷〉のトポロジー場所と居場所の環境文学』水声社 P152。

[9] 同注 5、P171。

3.1 作品の粗筋

作品中、日本国籍を持ち、名をHirukoとした主人公の女性が「帰ろうと思っていた国が消えてしまっ」(P10)たが、「国がすでに存在しない人たちばかりを集めて話を聞く」(P6)趣旨で作った番組に参加したことがきっかけとなり、「移民言語学の研究」(P12)をしているデンマークの青年クヌートに目を付けられた。放送後、二人で会い、友達になった。後、同郷人探しの旅に出るHirukoに付き添い、二人で「旨味フェスティバル」(P56)の開催地ドイツのトリアーに、「鮨の国」(P100)の人らしき「Tenzo」(P56)という人に会いに行った。そこでインド人アカッシュとドイツ人ノラに出会った。そして、ノラからノルウェイのオスローに行っているテンゾ(Tenzo、ナヌークのこと)が戻れないため、フェスティバルが中止となったという情報を手に入れ、テンゾの後を追って、オスローに行った。その時、テンゾが「鮨の国」の人ではなく、グリーンランドの出身であることが判明した。と同時にHirukoと同郷人らしきSusanooのことをテンゾから聞いた。すると、一行の5人がさらにSusanooがいる南フランスのアルルで落ち合うことにした。ところが、Susanooには会ったが、失語症に罹っているSusanooとは言葉でコミュニケーションすることはできなかった。それでも、「スピーチを始めた」(P308)Susanooの「声が聞こえない」(P308)が、ノラが「聞こえなくても理解できたのね」(P309)と言った。終盤では、アッカシュがSusanooの唇の動きを読み取って、Susanooに「君は失語症の研究所に行ってみたいんだね。君が行きたいなら僕もいっしょに行くよ」(P308)と言った後、Hirukoが「これは旅。だから続ける」(P309)と言って、その続きがあることを暗示した所で作品が終わりについた。ちなみに、作者多和田葉子は確かにその続編があると主張したこと[10]があ

[10] 週刊読書人ウェブ多和田葉子(作家) 郷原佳以 (東京大学准教授) (2019年5月18第3239号)「多和田葉子氏インタビュー沼のなかから咲く蓮の花のように」(第2回Hirukoは流れ続ける運命)
https://dokushojin.com/article.html?i=3319&p=3(2019年5月13日閲覧)

台灣日語教育學報第33號 禁止複製

り、2019 年 1 月から『群像』(七十四巻)に連載を続けている『星に仄めかされて』がその続編と見てよい。

3.2 作品の詳細――分量、時間、注意事項

『地球にちりばめられて』は、主役と見なされる Hiruko とクヌートが各自語った 3 章のほかに、脇役のナヌーク、アカッシュ、ノラ、Susanoo が 1 章ずつ語っており、多和田葉子の作品ではかつて見られない複数な登場人物が交互に語る形を採った作品である。10 章によって構成された詳細の重点を、表 1 に整理している。

表 1　『地球にちりばめられて』の詳細の重点

題名	分量	場所	時間	注意事項
第一章 クヌートは語る	P5-28 (26 頁)	コペンハーゲン(デンマーク)	ある「日曜日」	日曜日(P11)、「Hiruko, J.」(P11)、「J さん」(P14)、「ナマ放送」(P17)、
第二章 Hiruko は語る	P29-51 (23 頁)	オーデンセ (デンマーク)	第一章より第二章の方が先	「ナマ放送で来週火曜」(P44)
第三章 アカッシュは語る	P52-82 (31 頁)	トリアー (ドイツ)	第三章より第四章の方が先	第一章の翌日
第四章 ノラは語る	P83-116 (34 頁)	トリアー (ドイツ)	第四章より第五章の方が先	「一ヵ月前のこと」(P88)
第五章 テンゾ/ナヌークは語る	P117-156 (40 頁)	オスロー (ノルウェー)		Susanoo に関する情報を提供
第六章	P157-	オスロー		

台灣日語教育學報第33號 禁止複製

Hiruko は語る（二）	192（26 頁）	（ノルウェー）		
第七章 クヌートは語る（二）	P193-221（29 頁）	コペンハーゲン（デンマーク）		
第八章 Susanoo は語る	P222-259（38 頁）	アルル（フランス）	第 9.10 章の方が先だとは妥当ではない。	語る理由は不明。「その日」(P256)、ノラとアカッシュが登場
第九章 Hiruko は語る（三）	P260-284（25 頁）	アルル（フランス）	第十章より先にあるはず	登場人物は Susanoo、Hiruko、クヌート、ナヌークの 4 名
第十章 クヌートは語る（三）	P285-309（25 頁）	アルル（フランス）	第九章に続く	「月末の土曜日」(P290)、登場人物は Susanoo、Hiruko、クヌート、ナヌーク、クヌートの母、ノラ、アカッシュの 7 名

台灣日語教育學報第33號 禁止複製

表 1 を見て分かるように、作品空間は実際にデンマーク、ドイツ、ノルウェー、フランスといった順に広範囲に移動している。登場人物の国籍もそれぞれ違っている。その他の、各章の分量、時間、注意事項にも注意を促がしたく、順番に述べることにする。

3.2.1 分量――隠された Susanoo の存在

まず、分量的に見ると、トップの「第五章テンゾ/ナヌークは語る」

の 40 頁に次いで、38 頁の「第八章 Susanoo は語る」が二番目となっている。このトップの「第五章テンゾ/ナヌークは語る」の 4 頁(P144-147)ほどは、まだ登場していない Susanoo という男性の紹介に費やされているが、その 4 頁を引くと、二番目の「第八章 Susanoo は語る」がトップの座を占めるはずである。その「第八章 Susanoo は語る」では、本人 Susanoo が登場し、自分で生立ちを明かした。そして、第五章も第八章も Susanoo のことが触れられているという点では、共通している。作品を占めた分量と共通点からは、物語の発端が Hiruko にあり、Hiruko が主役と見なされるはずだが、実は物語の主役は Susanoo だと言っても過言ではない。

3.2.2 時間設定――問題視すべき第八章

10 章によって構成された作中時間が作品発表時の 2016 年に想定してよい[11]が、各章の時間が前後しているため、記述を把握しづらい所が確かにある一方、後に来る章を読んだ後、前にあった章を再読するようなことが課せられる。例えば、「第二章 Hiruko は語る」、「第三章アカッシュは語る」、「第四章ノラは語る」の 3 章は、それぞれ前章より時間的に先に起きたことのため、時間順に沿って読むだけでよいのではなく、翻って前章の内容を読み直し、再確認することが必要とされる。

「料理人のコンペティション」(P156)が行われる前日、当日、翌日のように「第五章テンゾ/ナヌークは語る」、「第六章 Hiruko は語る(二)」、「第七章クヌートは語る(二)」は時間的に連続しているが、「第九章 Hiruko は語る(三)」は、「月末の土曜日」(P290)とされた「第十章 クヌートは語る(三)」の前に来ることが分かるが、「第八章 Susanoo は語る」の時間は不明である。結論を先に言ってしまう

[11] 第一章では、語り手のクヌートが自分が「国を失った第二世代」(P9)で、母親の病気が「デンマークがグリーランド領を正式に失ったことと関係ある」(P9)と語っている。その母親が第九章の語り手の Hiruko には「歳は四十半ばだろうか」(P284)と見える。デンマークがグリーランド領を正式に失ったのは、1979 年だそうである。作品の現時点は、作品発表時の 2016 年だとすれば、その時点で「四十半ば」と設定されたため、クヌートの母親が 1979 年に小学生で、1970 年前後の生まれだと推測されよう。

台灣日語教育學報第33號 禁止複製

と、「第八章　Susanooは語る」一章だけは、辻褄の合わない問題のある一章であり、重大視すべき箇所でもある。これについては、次項目と合わせて述べることにする。

3.2.3 注意事項――辻褄の合わない、際立っている第八章

表１の注意事項に掲げている通り、辻褄が合わない箇所が多々ある。特に「第八章 Susanooは語る」の必然性は目を引く。

その中[12]で何よりも正確に指摘できるのは、クヌートとHirukoがテレビの生放送を行う曜日のことである。第一章では、クヌートが、「日曜日」(P11)とされているのに対して、第二章では、「火曜」(P44)とされている。その不一致は単なるミスであろう。

また、章ごとに「第八章 Susanooは語る」を読んでいくと、ようやく大事な人物が登場して語ると自然に感じられるが、しかし、その後に続く第九章では同郷人 Hiruko が話掛けても、Susanooは一言も返事していない。そして、最後の第十章に至って、一言も返事していないSusanooが実は「失語症」に罹っていたということが判明した。第十章を読み終わった時点で、再び「第八章 Susanooは語る」を読み返すと、何故Susanooが語らなければならないか、Susanooが誰に向かって語っているのか、「失語症」に罹っているにも関わらず、何故、Susanooが語れるのか、と疑問に感ぜざるを得ない。前後の関係の中での位置付けが困難な章である。

3.2.3.1「第八章 Susanooは語る」がどの時点でされているか

台灣日語教育學報第33號 禁止複製

[12] 文脈からすると、「ワサビ」とすべき所が「サビ」(P103)と誤植されている。そして、呼びかたの不一致さのことであるが、クヌートがテレビ番組の映像に「Hiruko,J.」と紹介されたHirukoに会いたいから、テレビ局に電話して、「今テレビに出ているHirukoさんにお会いすることはできないでしょうか」(P12)と言ったが、テレビ局から「Jさんはあなたに会いたいと言っています」(P14)と言われた。初対面したクヌートとHirukoの二人だが、外見はともかく、Hirukoがクヌートという人の内面を「面倒なことが嫌いで、子離れできない母親にうんざりしている上、言語にエロスを感じる体質なのだった」(P46)と判断する根拠は弱い。また、インド人アッカシュがクヌートとドイツで話している時、Hirukoがついていけないので、通訳してほしいと言ったが、失語症のSusanoo(キール大学に留学したため、ドイツ語ができるはずだが)の唇の動きを読み取れた人は、同郷人Hirukoではなく、インド人アッカシュに設定したのも、少々道筋が通らず、理解に苦しむ。

「第八章 Susanooは語る」では、Susanooが自分の生い立ちを語り、「その日」(P256、下線部分論者による。以下同様)を取り立てて、散歩した「野外円形劇場」(P256)で母に似た「一人の女性」(P256)を見かけた。「その日の夕方」(P257)に、Susanooは働いている店に入り、初対面の挨拶をしたノラと、アカッシュのことが触れられている。したがって、ノラとアカッシュに初めて対面したのが、Susanooが物語った日に起きた事件だということは、動かせないことである。

それに対して、第九章に続く第十章では、クヌートがSusanooに向かって「あなたに会いたい、あなたと話したいと思っているのは、このHirokoです。僕らは彼女の応援団です。僕とこのナヌークとそれからあと二人ノラとアカッシュ。もうすぐ彼らもここに来ると思います」(P282)と言ったが、しかし、その場に入ってきたノラとアカッシュはSusanooに対するのではなく、クヌートの母親にしか初対面の挨拶をしなかったことから見ると、第十章では、ノラとアカッシュが初めてSusanooに会ったわけではない。もしかしてノラとアカッシュが既にSusanooに会ったことを知らないからクヌートがそう言ったのかもしれない。また、本作品の各章の作品時間が前後しているため、必ずしも順番に章ごとに読む必要はない。そうだとすれば、第八章が第九章と第十章の前に行われる可能性もあろうが、こうなると、「第八章 Susanooは語る」は失語症の治療を受けて語れる状態に回復したと読むべきになろう。しかし、そうすると、第八章では、Susanooがノラとアカッシュとは初対面だということが十分に説明しきれない。このように読むことの難しさがさまざまな点でこの作品には存在している。

3.2.3.2「第八章 Susanooは語る」は続編に回されるべきか

上に挙げた疑問を解くには、回答を続編『星に仄めかされて』に求めるしかない。同じく複数の語り手が交互に語って、作品空間がSusanooの病院に変わり、新しい人物ムンン、ルマーが相次いで登

台灣日語教育學報第35號 禁止複製

場している続編『星に仄めかされて』(5回までの連載[13])を見る限り、少なくとも「第八章 Susanooは語る」に対して抱いてしまう疑問がまだ解かれていないままである。要するに、「第八章 Susanooは語る」がどの時点で語られたかは、相変わらず不明である。

3.2.3.3「第八章 Susanooは語る」を挿入する不自然さと不合理さ

「第八章 Susanooは語る」が登場する問題点を分かりやすく説明するには、照合に漱石の『こゝろ』(1914)を例として取り上げよう。「上先生と私」、「中両親と私」、「下先生と遺書」の3部によって構成された『こゝろ』では、「先生」という人物に「私が死んだ後でも、妻が生きてゐる以上は、あなた限りに打ち明けられた私の秘密として、凡てを腹の中に仕舞つて置いて下さい」[14]と言われた「私」が、「先生」の遺書を世に公開したことになる。あれだけ「先生」を慕っている「私」が「先生」の意思に背くはずはない。きっと何らかの理由、例えば「先生」の奥様が既にこの世にいないということも考えられる。あるいは、小森陽一が言った「先生」の妻と共生する道を選んだこと[15]もありうる。いずれにせよ、『こゝろ』では、「先生」の遺書を公開しなければならない理由は説明できたのに対して、「第八章 Susanooは語る」を挿入する必然性は、いくら考えても、不自然で不合理なことだと言わざるを得ない。

上記に述べた疑問が解けないまま、いろいろと考えた末、辻褄が合わなくても、無理をしても、「第八章 Susanooは語る」を挿入しなければならない理由は、ただ一つだけである。それは、『地球にちりばめられて』を読むには、「第八章 Susanooは語る」を抜きにしては物語が成り立たないほど、大事な情報が隠された一章だということである。

台灣日語教育學報第35號 禁止複製

---

[13] 『群像』第七十四巻第一号講談社(2019.1)、『群像』第七十四巻第二号講談社(2019.2)、『群像』第七十四巻第三号講談社(2019.3) 、『群像』第七十四巻第四号講談社(2019.4)、『群像』第七十四巻第五号講談社(2019.5)の5回である。

[14] (1975・1966)『漱石全集』第六巻岩波書店 P288

[15] 小森陽一(1985)「『こころ』を生成する心臓」『成城国文学』創刊号成城国文学学会

4. Susanoo の語りと日本消滅に連結して

前述したように、『地球にちりばめられて』を読むには欠かせない「第八章 Susanoo は語る」と日本が消滅したこととの関連性について本節では考えてみよう。

4.1 クローズアップされている原子力発電所のこと

Susanoo が語った内容は主に「母への思慕」、「性癖」、「原子力発電所」の 3 点に絞ることが出来る。

まず、「母への思慕」のことであるが、「中学一年生の春」(P230)に、出身地を「福井」(P227)という Susanoo の母は家出した後、放課後が近づくと「母さんがもしかして今日は家にいるんじゃないかという期待で胸がつるつるいっぱいになっ」(P230)たが、期待は外れてしまった。「オレは捨てられた子犬のよう」(P232)な思いを抱き、学校で苛められ、「スサノオ」(P234)の渾名まで付けられるようになった。そして進路を決める際、母のいると言われる「北海道」(P239)を選択肢に挙げたが、結局ドイツのキールで船舶を勉強することに決めた Susanoo は、勉学を止めて転々とし、アルルに移った。すると、そこにある「野外円形劇場」(P256)で若かった母の「横顔」(P256)に似た「一人の女性」(P256)を見かけた。このように、Susanoo の母への思慕は長く続いている。母への思慕から Susanoo の持つ「近親相姦」願望を読み取ることもできよう。

それは『古事記』を典拠にした天照大神と弟須佐之男の説に対して出した新説から見られよう。

スサノオが「皮を剥いだ馬を機織り小屋に放り込んだ。(中略)機織り嬢は驚いたはずみで、機織り機のつんつんにとがった部分に膣を刺されて死んでしまった」(P235)ことを、「スサノオが尖った性器を差し込んだ相手はアマテラスオオミカミ自身で、そのショックで彼女は性格が分裂して」(P235)と Susanoo は新説に思い至った。現実に、少年時代の Susanoo は皮を剥いだ馬ではなく、ドブネズミを「ミシンを使っている母さんの手もとに置いたのだ。母さんは悲鳴

台灣日語教育學報第35號 禁止複製

を上げて飛びあがった拍子に手の甲に針がひっかかって、肉が裂けた」(P234)という悪戯をしたことがあるが、母は幸いに『古事記』の機織り嬢のように膣を刺されて死ななかったが、敢えて『古事記』と同じような悪戯をしたのは、別に理由がある。それを Susanoo が『古事記』に関して出した「スサノオが尖った性器を差し込んだ相手はアマテラスオオミカミ自身」という新しい説から匂わせる性的関係と一緒に考えると、母に悪戯をしたことは、Susanoo の母への思慕があり、『古事記』に出たスサノオの「近親相姦」のような願望を表したものとも理解されよう。

次は、「性癖」のことである。自分の「女の柔らかい肉を見ると痛めつけたくなる」(P236)、「おかしな性癖」(P236)に気づき、父の失敗したロボットを「改造し、こっそり性的快楽の対象にしていた」(P236)。その後、留学先のキールで出会ったアンケと性的関係を結んで、心配していた自分の性的「異常」(P245)が回りの人と全く変わらないと分かって安心していたが、Susanoo がカルメンという女性に出会い、彼女が「オレのために造られたロボット」(P290)であってほしいという思いが強くなり、結局自分の子を妊娠しているアンケを捨てて、アルルにいるカルメンの後を追いかけていった。

最後は、「原子力発電所」のことである。Susanoo の父は「ロボット技師」(P225)であり、地元の「故郷の誇るべき歴史を次の世帯に伝えるために建てられる」(P227)と言われる博物館の発注で実在した人物カクさんをモデルにロボットを造り、「故郷 PR センター」(P227)に展覧し、東京への出稼ぎをする代わりに、「長い間忘れられていた発電所が再稼動されることになった。(中略)この地方は大昔は電気の銀座とまで呼ばれていた。わたしたちはどれほど嬉しかったことか」(P229)から始まり、「発電所の安全性は何度も厳重にチェックされ、再稼動が始まったんだ。それ以来、わたしたちの暮らす地域の経済は安定している」(P237)と繰り返し原子力発電所の安全性を宣伝している。その言葉については、かつて父から、「ロボットのしゃべる言葉は言葉ではない。数式だ」(P226)と教わり、「テキス

台灣日語教育學報第33號 禁止複製

ト担当の人がうちに相談に来て、父さんと喧嘩するみたいに熱くなって何時間もしゃべっていった」(P229)ことも目撃したSusanooは、ついに「どんなに心をこめて造っても、人間をだまし、傷つける道具として使われてしまう。そんなロボットをこの世にこれ以上、送り出したくなかった」(P239)と思ようになった。海外留学を決めた時点で、父が「カクさんが子どもたちに伝えてきたこと。あれは嘘だ。ロボットだから平気な顔で嘘がつけるんだ」(P242)と本心を明かしてくれた。嘘でも平気に原子力発電所の安全性を保証したロボット・カクさんの行動を裏返しに考えると、原子力発電所こそ、環境、人類に与える悪影響は人間の想像を遥かに超えた大きさをもっているものになろう。まして、普段「授業中は政治的な意見は一切口に」(P239)しない、化学を教えているSusanooの担任先生が、原子力発電所の再稼動への反対に加わり、「プルトニウム、セシウムなどの半減期について淡々と話してくれた」(P239)とSusanooの記憶に残っている。こうしてみると、Susanoo の語りからは正に原子力発電所に傾斜する日本の行方が案じられ、日本に悲劇を齎す危険性があると推測されよう。

要するに「第八章 Susanooは語る」で焦点とされた「失語症」に罹っているSusanooを無理矢理に登場させ、語らせることから浮かび上がってくるのは、「原子力発電所」のことに集中するのである。というのは、「母への思慕」、「性癖」がSusanooの個人の内面的事情であり、日本消滅に繋げては考えにくく、原発災害に見舞われ、日本が消滅したことの可能性のほうが大いにあるからである。これを次の項目と一緒に再度検討する。

4.2 日本消滅の真相をさぐって

作品では、明確に「日本」とは名指していないが、「中国大陸とポリネシアの間に浮かぶ列島」(P9)、「北越」(P22)、「新潟県」(P22)とあることから、日本のことが想定されよう。そこで、誤解を招かないように、本論文では敢えて「日本」と明示することにする。日

台灣日語教育學報第35號 禁止複製

本人と見られるHiruko[16]とSusanoo[17]の二人は、年齢的に差があると思われる。「一年の予定でヨーロッパに留学し、あと二ヵ月で帰国という時に、自分の国が消えてしまって家に帰ることができなくなってしまった」(P9) Hirukoは若い世代に属している。一方、Susanooはフーズムで友人ヴォルフと一緒に開いた鮨屋がヴォルフの「孫の世代」(P147)に代わり、ナヌークがそこでSusanooに関する情報を手に入れた。したがって、HirukoとSusanooは同世代の人ではなく、二人が触れた日本のことも時期的に違うものだと言えよう。ちなみに、ナヌークがSusanooの情報を手に入れた鮨の店が、Susanooの同年代の友ヴォルフの「孫の世代」(P147)に代わるなら、Susanooがある程度年を取っていると考えられるが「いつからだろう。歳を取らなくなったのは。時間はオレの左右を風のように素通りしていく」(P222)と自分で感じたこと、また店長に「お前は一体何歳なんだ。昔の写真と比べても全然歳をとっていないな」(P257)と言われたことから考えると、『献灯使』に収めた短篇「不死の島」に描かれた、放射線の影響によって死ぬことが出来ない、「百二十を越えてもまだびんびんしている」(P196)[18]老人の様子を思い出さずにはいられない。

さて、日本消滅について、各登場人物によって出された説を見てみよう。

(一)若い世代が言う日本消滅

(A)Hirukoの説

「自分の田舎を田舎でなくすことに人生を賭けて、とんでもないことをしでかした男がいた。この男が努力家であったことは否めない。

[16] Hirukoが故郷に使う雪パイプが初導入した昭和36年(1961年)以後の生まれで、青年クヌートと年はあまり変わらないし、「一年の予定でヨーロッパに留学し、あと二ヶ月で帰国という時に、自分の国が消えてしまって、家に帰ることができなくなってしまった」(P9)ため、20代と想定してもよい。

[17] Susanooの故郷福井に原子力発電所が1970年に初導入され、1972年に原子力センターが開館された。開館されたばかりの時に、Susanooが「小学校の課外授業」(P227)で訪ねたことから見れば、Susanooが1960年代の前半の生まれで、現時点の2016年から逆算すると、60歳近くなると推測されよう。

[18] 多和田葉子(2014)『献灯使』講談社 P196

台灣日語教育學報第35號 禁止複製

しかし努力家がみんなの迷惑になることもある。この男は自分の生まれた土地を首都圏の一部分にしようとして、間にまたがる山脈をブルドーザーで削ってしまおうとした。そうすれば、共産圏から吹いてくる湿度の高い冬の風が山にあたって雪が降ることもなくなると考えたのだ。そこで大型ブルドーザーを公費で買って山を崩し始めたのはいいが、崩すのが楽しくなって、とまらなくなり、そのうち山がどんどん削られていって、地球の温暖化で水位が上がると、平たくなった島全体が太平洋に沈んでしまった。そういう筋書きでわたしの国がなくなってしまったということもありうる」(P26-27)

(B)アカッシュが触れたこと

「どうやら彼女の国は消えてしまったようだが、(後略)」(P60)

(C)クヌートが触れたこと

「消えたというのは悲しい言葉だね。でもリセットだと思えばいいんじゃないかな。」(P62)

(D)ヴォルフの孫が触れたこと

「自分の生まれ育った国が滅びてしまったなんて。海外に少数生きのこっている同郷人同士で連絡をとりあって、ネットワークでもつくっているのかい」(P147)

(E)ナヌークが触れたこと

「もちろん、滅びたというのは噂に過ぎないかもしれない。何か政治的な理由でその国が世界から孤立し、交流がなくなっただけかもしれない」(P147)

Hiruko の説に従えば、日本では、山々を過度に削って開発をしたせいで降るべき雪も降らなくなるという環境問題となり、ついに深刻な「地球の温暖化」に繋がり、日本全島が太平洋に沈んでしまったという。アカッシュの場合は、Hiruko の様子を見て下した推測に過ぎない。消えたというよりもリセットだと思ってほしいということは、あくまでもクヌートが Hiruko を慰める言葉にしか聞こえない。日本を「第二の故郷として選んだ」(P147)偽日本人のナヌーク

台灣日語教育學報第33號 禁止複製

が、「滅びたというのは噂に過ぎないかもしれない。何か政治的な理由でその国が世界から孤立し、交流がなくなっただけかもしれない」と仮説を出している。この仮説は、例の「不死の島」に描かれた鎖国状態の日本の様子を彷彿とさせる。

Hiruko が生まれ育った日本は、「かなり昔からすでに性ホルモンがほとんど消滅していた」(P47)と Hiruko が言い、「文化の中に性ホルモンがない」(P48)と強調した通りである。性ホルモンの消滅は子孫を残さないことに等しい。それに反して、『献灯使』に収めた短篇「献灯使」では、放射能の影響で過酷になった環境に積極的に適応し、生き残るために「誰でも人生のうち必ず一度か二度は性の転換が起こるようになったのも自然の策略の一つだろう」[19]と子孫を残す自然法則が提起されている。「献灯使」と比べて、Hiruko が生きていた日本は、放射能の悪影響が全土に及び、子孫を残すことなく滅亡する道をたどっていった国だと言えよう。

(二)古い世代が言う日本の「大惨事」

(A) Susanoo が経験したこと

「オレには大学も造船も向いていないのかもしれない。そのことを匂わせた手紙を父さんに書いたが、返事はなかった。便箋に書いてもらっても、電子通信で送っても返事は来なかった。高校時代に汗まみれの楽しい時間を共有した仲間たちからも連絡がなかなった。オレのことなど忘れてしまったに相違ない」(P246)

(B)アンケが触れたこと

「あなたの国に大惨事が起こって連絡できないんじゃないの」(P247)

Susanoo と恋人アンケの証言では、日本は「大惨事」に見舞われて連絡が途絶えてしまったという。ただ、その「大惨事」の後でも、「一年の予定でヨーロッパに留学し、あと二ヵ月で帰国という時に、

[19] 多和田葉子(2014)『献灯使』講談社 P107

台灣日語教育學報第35號 禁止複製

自分の国が消えてしまって家に帰ることができなくなってしまった」(P9)というように、Susanoo より若い世代の Hiruko が言った「日本消滅」を細かく見ると、それは Susanoo がいた時の日本全島が放射能を浴びたことに加えて、地球の温暖化の二重影響を受けたためになろう。ここでいう放射能の影響とは、ほかでもなく、Susanoo が「不幸な発展をとげて『銀座』と呼ばれるようにな」(P145)った福井に出来た「故郷 PR センター」(P145)に関わって過ごした少年時代から既にあったものだと考えられよう。

ここでは、忘れてならないのは、Hirukot と Susanoo が触れた各時期の日本はいずれも原子力発電所、科学技術が進んでいる日本だということである。Susanoo がいた日本では、原子力発電所の再稼動を宣伝するようにロボットを使っていたのに対して、Hiruko がいた日本では、北越の村でも「ハイテクな土地柄」(P21)でセンサーで積雪を感知して、「ナビゲーション・システム」(P25)の付いた履物、いわば AI 技術を生活に活用している。技術が高度に進んでいる日本が、過度に技術開発をし、歯止めが利かなくなったため、自滅に向かったというのは自業自得の結果と言わざるを得ない。日本が消滅したことの設定は、正にその過度に開発された原発技術へ鳴らす警鐘だと言ってもよかろう。

台灣日語教育學報第33號 禁止複製

5.エコフェミニズムによる『地球にちりばめられて』の分析

前述したように、本論文では「あらゆる抑圧を生産する支配関係を問い直す」ことを指針として、『地球にちりばめられて』で描かれた日本の消滅を検討してみよう。

Susanoo のいた日本が「大惨事」(P247)と暗示されたように、外との連絡が途絶えてしまった。その「大惨事」を突き止めると、Susanoo が語った「福井」(P227)にいるロボット・カクさんの宣伝文句である。東京への出稼ぎをする代わりに、「長い間忘れられていた発電所が再稼動されることになった。(中略)この地方は大昔は電気の銀座とまで呼ばれていた。私たちはどれほど嬉しかったことか」

(P229)に始まり、「発電所の安全性は何度も厳重にチェックされ、再稼動が始まったんだ。それ以来、わたしたちの暮らす地域の経済は安定している」(P237)とは裏腹に、結局、再稼動した原子力発電所は安全性を確保できず、想定外の悲劇を引き起こしたと考えられる。ここでは、「電気の銀座」を福井に作らせた大財団が地方福井を支配する構図が見られる。

時代が下り、Hirukoのいた日本は、地方を首都圏の一部分にしようとして山々を過度に削って開発をしたせいでついに深刻な「地球の温暖化」となり、日本列島は沈没してしまった。人間の貪欲による自然支配のもと、自然が破壊されつつあり、結局人間が住んでいる日本という国は消滅した。ここでは、人間と自然との対立が構図されている。

このように、都会による暴力的地方支配、人間による暴力的自然支配は、いずれも抑圧を生産する支配制度から生じたものであり、糾弾すべき、批判されるべきものばかりである。エコフェミニズムの視点を通して『地球にちりばめられて』を読めば、第八章で描かれた物語に織り込まれているのは、人間の貪欲によって生み出された利害関係の結果、原子力発電所やさまざまな技術が利用され、過度の自然開発がおこなわれたことによる破綻が齎した国家消滅・滅亡の深刻さなのである。

台灣日語教育學報第3號 禁止複製

6.おわりに

国家・故郷意識の不要、固定した性別の不要、多言語の使用、不法移民などを取り扱っている『地球にちりばめられて』は、グローバル時代下においての地球的視点から読解を試みるに値する作品だが、紙幅の関係で、今回は技術面が進んでいる日本が消滅したことだけに焦点を当てて考察することにし、残りの課題の考察は今後の課題とする。

さて、今回考察した結果であるが、Susanooがいた日本の、「大惨事」に暗示された原子力発電所の悲劇、Hirukot がいた日本の地球

の温暖化の二重の影響により、日本は消滅したのである。日本消滅は、正に過度に開発された原子力技術へ鳴らす警鐘だと言ってもよかろう。多和田葉子はかつて、『献灯使』では人間が原発事故の影響を受けた日本共同体を内側から描いていたのに対して、『地球にちりばめられて』では、消滅した日本共同体を外側から描いており、「二つの作品は対になっている」[20]と述べたことがある。ただし、視点に内側、外側の違いがあるから、対になっているわけではない。放射線の影響による元気な老人、性的変換、鎖国状態が両作品の間では底流しており、原発事故で繋がっている。それは、不自然に挿入された「第八章 Susanoo は語る」からすると、より明確に読み取れる。結局、ポスト 311 作家多和田葉子が「全然違うテーマを考えていても、震災抜きでは、今の日本は書けない」[21]と述べた通り、内側から描いた『献灯使』とは違い、外側から描いた『地球にちりばめられて』こそ、グローバル時代に相応しく、諸問題を一段と掘り下げた新しい視点で描きえた文学作品だと言えよう。

台灣日語教育學報第33號 禁止複製

テキスト

多和田葉子(2018)『地球にちりばめられて』講談社

参考文献

(一)雑誌、著書

(1975・1966)『漱石全集』第六巻岩波書店

小森陽一(1985)「『こころ』を生成する心臓」『成城国文学』創刊号 成城国文学学会

森岡正博(1995)「エコロジーと女性―エコフェミニズム」小原秀雄

[20] 週刊読書人ウェブ多和田葉子(作家) 郷原佳以 (東京大学准教授) (2019 年 5 月 18 第 3239 号)「多和田葉子氏インタビュー沼のなかから咲く蓮の花のように」(第 2 回 Hiruko は流れ続ける運命) https://dokushojin.com/article.html?i=3319&p=3(2019 年 5 月 13 日閲覧)

[21] 多和田葉子・ローバトキャベル対談(2015)「やがて希望は戻る一旅たつ『献灯使』たち」『群像』1 月号講談社 P224 では、「全然違うテーマを考えていても、震災抜きでは、今の日本は書けない」とある。

監修『環境思想の系譜・3』東海大学出版会
井上輝子・上野千鶴子代表編(2000)『岩波女性学事典』岩波書店
山口裕司(2003)「エコフェミニズムの論点とその可能性―C・マーチャントを手がかりに―」『宮崎公立大学人文学部紀要』第10巻1号宮崎公立大学人文学部
喜納育江(2011)『<故郷>のトポロジー場所と居場所の環境文学』水声社
渡久山清美・渡久山幸功(2013)「エコフェミニズム再考一開発資本主義家父長制に対するオルタナティブな理論としてー」『人間学科』29号琉球大学法文学部人間科学科
多和田葉子(2014)『献灯使』講談社
多和田葉子・ローバトキャベル対談(2015)「やがて希望は戻る一旅たつ『献灯使』たち」『群像』1月号講談社
曾秋桂「エコフェミニズムの視点から読む『チェルノブイリの祈り』」(2018)『台湾日本語教育論文集』第30号台湾日語教育学会
(2019.1)『群像』第七十四巻第一号講談社
(2019.2)『群像』第七十四巻第二号講談社
(2019.3)『群像』第七十四巻第三号講談社
(2019.4)『群像』第七十四巻第四号講談社
(2019.5)『群像』第七十四巻第五号講談社
(二)ネット資料
(2019年5月18第3239号)「多和田葉子氏インタビュー沼のなかから咲く蓮の花のように」(第2回Hirukoは流れ続ける運命)https://dokushojin.com/article.html?i=3319&p=3(2019年5月13日閲覧)

(注記)本論文は、107年度科技部研究計画案(MOST107-2410-H-032-016MY2)による研究成果の一部分である。なお、論者に関する研究業績はhttps://orcid.org/0000-0002-5093-582Xをご参照。

台湾日語教育學報第33號 禁止複製